

〈翻訳〉

リタ・フーバー＝シュペール

ドイツ市民社会における女性主体のクラブ・組合

——《長き 19 世紀》：1780-1910 年期の概観——(2)

河野 眞 (訳・解説)

目次

[小解]

1 はじめに

2 数値データから見た女性組合

グラフ 1, グラフ 2, グラフ 3

3 女性組合の典型をめぐる問題性

4 市民的女性組合の発展の概略

グラフ 4

第一段階 1810-1840 年期：組合活動への苦難の道

第二段階 1840-1865 年期：女性の社会参加の限界の顕在化

以上前号 (第 158 号)

第三段階 1865-1885 年期：改革の挽回と《女性問題》への《非政治的》関心 179

第四・五段階 1885-1910 年期：拡大・分岐・中央集権——権利と改革への闘い／
《政治的混合》 182

訳注 185

[訳者解説] 192

第三段階 1865-1885 年期：改革の挽回と《女性問題》への《非政治的》関心

永き反動の十年余、その時期に女性組合の設立はほとんど見られなかった。1860 年代に入ると、フェルアイン (クラブ・組合) への女性の関わりはふたたび活発化した。1860 年代初めのリベラリズムの新たな進展、国民的な統一運動、戦争とドイツ帝国の成立、帝国内でのリベラルな市民層の右傾化、工業の発展と官僚主義の進展の下での労働市場の変化、これらが女性組合の設立と活動に影響をあたえた。女性たちは (これは男性も同様だったが) すでに半世紀以上前から組合というかたちでの社会参加の歴史をもっており、それを新たな課題に活用することができた。三月前期と三月革命において達成できなかった目標が、改めて生成しつつある組合文化

に影響した。影響を及ぼしたのは国民的統一への願望も同じであり、それは組合の地域を超えた構造として明白になった。こうした女性による組合のすべてについて言えるのは、基本的には、いわゆる《非政治的な》事項に限られたこと、すなわちプラグマティックな対応や問題点の単なる挙示に終わったことである。

第三段階の主要な潮流は、三つの側面においてとらえることができる。一つ目の側面は、三月前期と 1948-49 年の革命のなかで掲げられた社会改革の理念と女性に特殊な解放の理念を新たにつかみ直すことであった。労働者・民衆・女性の教養形成の分野における市民的志向と市民化への《誘掖》によって社会を平穏ならしめんとする願望は、組合をめぐる動向にも反映された。市民女性の職業問題の《解決》が図られたのは正にそれであった。具体的には、教育改革の継続で、フリードリヒ・フレーベルの理念による幼稚園の開設や女性教育者養成ゼミナール設立の大きな波が起きた。また新たな重点項目として女性の《労働能力》のプロフェッショナル化を掲げる女性組合が新設されるようになった。テキスタイル作りの職業訓練学校の設立や、女性の手仕事製品の市場の開拓はその脈絡に位置づけられよう。さらに、長期にわたって多大の意義をもったのは、市民女性が生計を立てるに足る新たな職種づくりで⁽⁶⁹⁾、それは、市民女性に高度な技能を得させることを目的としたプライベートな組織的営為によって推進された。女性ための《速記講習組合》あるいは商業簿記コースなどである。生業・労働者の課題の解決に向けてイニシアティブを発揮したりベラルで社会性に富んだ改革者たちは、次いで市民の少女と成人女性の職業訓練と収入につながる労働の問題に進出した。1866 年にベルリンで設立された「女性の職能向上のための組合」はそうしたもので、この団体は 1868 年から*「レッテ組合」となった。しかし因習的・家父長制的な観念の赴くところ、組合のリーダー及び外部に向けた代表には男性が就いた。その点では、生計としての職業問題はともかく、それを超える女性解放の思念は明らかに

(69) Gunda BARTH-SCALMANI / Margret FRIEDRICH, *Frauen auf der Wiener Weltausstellung von 1873. Ein Blick auf die Bühne und hinter die Kulissen*. In: *Bürgerliche Frauenkultur* (1995 前傾注 42), S. 175-232.; Herrad-Ulrike BUSSEMER, *Frauenemanzipation und Bildungsbürgertum. Sozialgeschichte der Frauenbewegung in der Reichsgründungszeit*. Weihheim 1985.

後退した⁽⁷⁰⁾。

二つ目は、紛れもなくイノヴェイティヴな側面で、1865年にライプツィヒで設立された*「一般ドイツ女性組合（ADF）」によって企図され、成功を収めた社会的運動を牽引する試みである。その運動は外から見ても明らかであったが、女性の関心にかかわり、女性の《自己裁量》を代表した⁽⁷¹⁾。当初、進歩的な諸勢力はこのADFの成立とライプツィヒ女性会議を歓迎した。が、運動が広範囲に基盤を固めるには一方ならぬ労苦を要し、停滞を余儀なくされた⁽⁷²⁾。と言うのは、三月前期と革命の後に生まれて所与の社会状況に馴染んでいた世代の女性たちについては、社会政治的な関心や女性解放の意識（自覚と言ってもよい）は改めて覚醒を要したからである。直近の女性解放運動に刺激され職業に焦点を合わせた初期の諸々のオーガニゼーションも進展はささやかであった⁽⁷³⁾。

同じ時期区分における三つ目の重要な側面は、1859年から1871年に至る頃に帝国規模でさまざまな《祖国女性組合》が結成されたことである。この種の諸団体の主要な目的は、軍隊での病者の看護、看護の人員の訓練と常時配備、また包帯の材料を集めるなど緊急物資を保管することであった。さらに《女性ならではの方法で》真の愛国心を明示した⁽⁷⁴⁾。これについては、*ケルスティーン・ルッツァーが「バーデン女性組合」に関する精彩に富んだ論説を寄せている。これらの団体は、《女性の政治参加》を目指す初期の諸々の組合とは反対に、女性解放を掲げることはなく、むしろ軍事・行政・医療の諸分野での男性の専門能力に合わせる姿勢を示した。しかし独自の活動分野は十分残っていた。愛国心に裏打ちされた《社

(70) Doris OBSCHERNITZKI, „Der Frau ihre Arbeit!“, Lette-Verein. Zur Geschichte einer Berliner Institution 1866 bis 1886. Berlin 1987.

(71) Susanne OMRAN, *Die Frauenbewegung als soziale Bewegung in Deutschland*. In: DIES., *Bewegung im historischen Wandel. Aktuelle Politik- und Mobilisierungsstrategien von Frauen am Beispiel feministischer Einmischung in Wissenschaft und Hochschule*. Pfaffenweiler 1995, S. 15–43.

(72) Herrad-Ulrike BUSSEMER, *Frauenemanzipation und Bildungsbürgertum* (1985 前傾注69).; Daniela WEILAND, *Geschichte der Frauenemanzipation in Deutschland. Biographien, Programme, Organisationen*. Düsseldorf 1983.; Ute GERHARD, *Unerhört. Die Geschichte der deutschen Frauenbewegung*. Reibek bei Hamburg 1990.

(73) Brigitte KERCHNER, *Beruf und Geschlecht* (1992 前傾注39), S. 73–102.

(74) Ute GERHARD, *Unerhört* (1990 前傾注72), S. 90–93.; Ute DANIEL, *Die Vaterländischen Frauenvereine in Westfalen*. In: *Westfälische Forschung* 39 (1989), S. 158–179.

会的母性》の概念⁽⁷⁵⁾の下での行動だけでなく、あからさまではないものの《性差の秩序》を覆すことにも吝かではなかった。

上からの推奨と支援を得たナショナリズム的な諸々の女性オーガニゼーションによって、女性たちの交流の度合いが高まっただけでなく、寄付金集めや組織作りや保護活動における女性の活動性は見紛いようがないものとなった⁽⁷⁶⁾。かくして市民女性の自発的な社会参加への信頼が成り立ち、その能力と奉仕の姿勢と《政治と家父長制への脅威ではない》ことは、やがて教会会衆への司牧に女性組合を関与させる動きを促した。特にプロテスタント教会における国内再布教や焦眉の急となった都市ミッションの態勢づくりにおいてであった。

第四・五段階 1885-1910年期：拡大・分岐・中央集権——権利と改革への闘い／《政治的混合》

1890年代には女性組合の設立は大きなブームとなった。それはハムブルクの女性組合に関するキルステン・ハインゾーンの考察が示す通りである。またそこで顕わになったトレンドは、女性組合の発展の《第五期》にも受け継がれた。それゆえ19世紀という《長期》における最後の2期は併せて見てゆくのが適切であろう。急激な都市化の下、文明の進歩に相應の生活感覚も重なって、組合は発展した。それにあたって、政治の諸事件や国家の干渉は特段の促進を意味せず、逆に阻害でもなく、あるいは指針にもならなかった。たしかに結社法に基づく《政治の禁止》がなくなるのは1908年まで待たねばならなかったが、何年も前からそれは形骸化していた。市民女性による組合の発展は、19世紀末には相應の土台ができており、数十年にわたる経験の蓄積を構築的なものに転換させた。

その発展を総じて特徴づけるのは、組合結成の爆発的な高まりと増加、または多様化と専門化であった。これと並行する顕著な動向は、中央集権化、多くの組合を束ねる聯合体の形成、ネットワークの進展、さらにコミュ

(75) 《社会的母性》(soziale Mütterlichkeit) に属する女性として、女性看護師、ケアマネジャー(Mutmacher)、保護司(Trösterin)、支援者(Beschützerin)などが挙げられよう。

(76) 祖国に関係する組合の資金的なバックボーンについては次を参照、Gilla DÖLLE, *Die (un) heimliche Macht des Geldes. Finanzierungsstrategien der bürgerlichen Frauenbewegung in Deutschland zwischen 1865 und 1933*. Frankfurt /M. 1997, S. 130-138.

ニケーションと理念の普及であった。国民国家のレベルでの関心のオーガニゼーション化も加速された。女性組合は平面的にも広がり、多くの大都市では屢々女性解放運動の目標をになう種類の女性組合が一団体あるいは数団体存在するまでになった⁽⁷⁷⁾。女性組合が早くから開拓していた既存の活動分野はいつその拡大と共に近代が図られた。《古くからの》テーマ、(より適切に言えば) 未解決の諸問題が、改めて直接的に、正面から、そして多面的に取り組まれた。昔ながらの社会的・チャリティー的な女性組合に加えて、社会的な、またモラルに関係する改革組合が設立された。たとえば下層市民の女性たちを社会実践と政治において代弁することを模索した組合である。その他、伝統的な女性の活動領域のプロフェッショナル化に力を注いだ女性教養組合に加えて、女性がアカデミックな教養を得るために戦う進歩的な組合である。

市民女性の職業の新しい可能性は、職業の別によるオーガニゼーションへと延び、また女性クラブの設立へすすんだ。後者では、特に職業に就いている女性たちが余暇を共に過ごす場所を見出した。そこでの立ち位置と分岐の推移には女性解放運動という筋が一本通っていた。同時に、そうした力は(同種の多数の組合を束ねる) 頂上団体の設立によってまとまりとなった。こうして強化され、もはや無視できなくなった女性解放運動は国と社会に要求を突きつけ、社会のなかでディススクールにおいて一般の耳にとどかすにはおかないまでになった。かくして社会的・市民的・政治的な権利に向けての闘いは進展し、男性が政治を独占するのをもはや座視しなくなった。

女性組合の数では、特に自治体のレベルでの社会参加の団体が大きく伸びた。これらの組合は、各種ケアを供する仕組みによって新しい喫緊事や問題に対処した。しかし1890年以後の女性組合の増加がハイペースであったのには、教会と共に宗教に関心の高い女性たちが《彼女たちの》信徒仲間を組織したことが大きく与った⁽⁷⁸⁾。教会宗派の立て直しと合法的な

(77) Christina KLAUSMANN, *Politik und Kultur der Frauenbewegung im Kaiserreich. Das Beispiel Frankfurt am Main*. Frankfurt/M.u.a. 1997, S. 310f. und 316.

(78) Marion KAPLAN, *Die jüdische Frauenbewegung in Deutschland. Organisation und Ziele des jüdischen Frauenbundes 1904–1938*. Hamburg 1981.; Doris KAUFMANN, *Frauen zwischen Aufbruch und Reaktion. Protestantische Frauenbewegung in der ersten Hälfte des Zwanzigsten Jahrhunderts*.

《組織的攻勢》はすべての種類の組合に影響を及ぼした。ほとんどすべての組合類型が分身を増やしていった。と言うのは、同じ目標が、サイズはもとよりすべてにおいて近似した組合によって追及されるようになったからである。すなわち、リベラルで市民的な女性組合の他、プロテスタント系、カトリック系、ユダヤ教のそれぞれの女性組合である。

組織としてまとまった女性たちは、19世紀から20世紀への転換期には、(権力と政治の法的な構造には位置づけられていないにも拘わらず) 強力な社会的勢力となっていた。職場での活動あるいは組合での活動へ入ってゆく可能性、家庭と母親という女性像の軟化、政治活動への進出とその姿勢の獲得、筆者の見るところでは、これらは女性にとって多大の前進であり自由の獲得であった。しかし、女性組合によって推進された社会的変革、自意識をもち公共という競技場で戦う用意のある女性たちの出現、職業と教養における女性たちの競合、政治権力の分有への女性の要求、これらは、それを不安視し阻止する動きをも誘発した。それは、世紀転換期頃の男性結社の会合やアンチ・フェミニズムの組織化(防衛闘争と言ってもよいだろう)という形をとった⁽⁷⁹⁾。20世紀初め辺りで、女性のオーガニゼーションが獲得した強度と力量はまたもや瓦解の憂き目にさらされ、しかも繪空事ではすまなかった。

女性とジェンダーの歴史にとって、と言うよりそれを超えて、女性組合の動向は文化的・社会的・政治的な存在感を高めた。長期的・文化史的なパースペクティブからは、19世紀に家父長制秩序の社会のなかで女性だけの自由なゲマインシャフトが受け入れられるまでになったのは、それ自体、革命的な成果であった⁽⁸⁰⁾。それにつけても、《フェルアイン(クラブ・

München 1988.; Uusula BAUMANN, *Protestantismus und Frauenemanzipation in Deutschland 1850 bis 1920*. Frankfurt /M.u.a. 1992.; Maria SCHERNTHANDER, *Die katholische Frauenbewegung in Wien 1848–1914*. Wien 1985.; Rupert KLIEBER, *Politischer Katholizismus in der Provinz*. Wien 1994. (特にザルツブルクにおけるカトリック女性オーガニゼーションの発展の章); *Im Namen des Herrn? Konfessionelle Frauenverbände 1890–1933* (= Ariadne, 35). Kassel 1999.

(79) Ute PLANERT, *Antifeminismus im Kaiserreich. Diskurs, soziale Formation und politische Mentalität*. Göttingen 1998.

(80) Wolfgang LIPP, *Männerbünde, Frauen und Charisma. Geschlechterdrama im Kulturprozess*. In: *Männerbünde – Männerbünde. Zur Rolle des Mannes im Kulturvergleich*, hg.v. Gisela VÖLGER/ Karin v. WIECK. 2 Bde. (Materialiensammlung zur gleichlautenden Ausstellung). Köln 1990, Bd. 1, S. 31–40.

組合》というコミュニケーションと共同活動と共同闘争の手立てがなければ、市民社会の性差秩序の壁を突破することはできなかったか、ほとんど無理だったか、あるいはずっと先延ばしになっていたかであったろう。また近代化へ向かう社会の安定と変転によって女性が実現した寄与は正に本質的なものであった。なお言い添えれば、女性組合にもっと注目が向けられていたなら、それらは、諸懸案の決定過程にも関与していたであろう。女性組合の共通感覚が構築的に活用されていたなら、社会にとって、悲痛な経験は軽減されていただろう。しかしこれは、女性組合が目指したもの・行なったものすべてが正しく良きものであったと言っているのではない。それは、アメリカ合衆国の女性組合の歴史のかなり長期を見渡したアン・F・スコットの本書所収の論説が特筆しているところでもある。

【訳注】

（「教会会衆」までは前号の頁）

p. 179 《長き19世紀》（das „lange“ 19. Jharhundert /The Long 19th Century） イギリスの歴史学者エリック・ホブズボーム（Eric John Ernest Hobsbawm 1917-2012）が三部作『革命の時代』（*The Age of Revolution : Europe 1789-1848*. 1962）、『資本の時代』（*The Age of Capital, 1848-1875*. 1975）、『帝国の時代』（*The Age of Empire, 1875-1914*. 1987）によって、フランス革命が始まった1789年から第一次世界大戦が勃発した1914年までを指した時代概念で、その後、1914-1991年期を《短き20世紀》（The short 20th century）と呼んで対比した。西洋史に照らした区分ながら、近・現代史の枠付けとして今日よく使われる。

p. 184 国民教育運動（Volksbildungsbewegung） 一般的・総称的な言い方でもあるが、指標的なものでは1871年に結成された「国民教育普及のための協会」（Gesellschaft für Verbreitung von Volksbildung）がある。創設者はヴィースバーデンの工場経営者フリッツ・カレ（Jakob Friedrich [Fritz] Kalle 1837-1915）、エルバーフェルトの教師フランツ・ライピング（Franz Leibing 1836-75）、進歩党の国会議員ヘルマン・シュルツェ＝デリツシュ（Hermann Schulze-Delitzsch 1808-83）であった。機関誌『教養組合』（Bildungsverein）を編んだライピングの没年には545団体4000人を超えるメンバーを擁するまでに発展していた。1893-1933年間はヨハネス・トイス（Johannes Tews 1860-1937）が業務を取り仕切り、またプロイセン貴族院議員・ドイツ帝国国会議員ハインリヒ・ツー・シェナイヒ＝カローラト（Heinrich zu Schoenaich-Carolath 1852-1920）が理事長となる期間が長かった。

p. 184 ベアーテ・クレム（Beate Klemm） ライプツィヒ大学で歴史学・ゲルマニスティク・文化研究を学び、特にライプツィヒにおける女性史とジェンダーの歴史的研究によって学位を得、同論文では市民女性による組合形成も取り上げられた。またこの論集

がまとめられた当時は『ライブツィヒ民衆新聞』のメディア資料室に勤務していた。

p. 186 **キルステン・ハインゾーン** (Kirsten Heinsohn 1963-L) ヴェーデル (WedelSH) に生まれた歴史学者・女性史家。ハムブルク大学で近代史・国民経済学・政治学を学び、近代史・女性史の研究によって同大学において1995年に学位を、2006年に教授資格を得た。2007年からハムブルク大学において歴史学を講じ、また副学長を務めた。ビーレフェルト大学やコペンハーゲン大学でも教え、ドイツ・ユダヤ人史研究所（ハムブルク）にも所属した。

p. 189 **カトリック女性同盟** (Katholischer Frauenbund) 1903年にケルンで結成された。この名称（略称 KFB）は1916年まで、次いで1916-21年期は「カトリック女性同盟ドイツ」(Katholischer Frauenbund Deutschlands 略称 KFD)、以後は今日まで「カトリック・ドイツ女性同盟」(Katholischer Deutscher Frauenbund 略称 KDF) を名乗っている。代表理事は創設から1912年までエミリーエ・ホープマン (Emilie Hopmann 1845-1926)、また創設を共にした副理事長にはミンナ・パッヒェム＝ジューガー (Minna Bachem-Sieger 1870-1939) とヘートヴィヒ・ドランスフェルト (Hedwig Dransfeld 1871-1925) がおり、後者は1919年に女性で初めて国会議員となった数人の一人であった（ヴァイマル国民議会）。今日ではドイツ全体で21司教区にまたがって1800か所の支部を要し会員は18万人を数えられるが、圧倒的多数はバイエルンである。バイエルンの副本部はエレン・アムマン (Ellen Aurora Elisabeth Morgenröte Ammann 1870-1932 旧姓 Sundström) によって1904年に設立され、急速に拡大した。アムマンは1923年のヒトラーのミュンヘン一揆に対して最も激しく厳しく対処した政治家であった。同盟は当初から女性の社会的進出と職能育成に力点を置き、現在に至るまでほぼ一貫して、同盟を背景とする国会議員が数えられる。

p. 189 **ドイツ・プロテスタント女性同盟** (Deutsch-Evangelischer Frauenbund 略称 1969年までは DFG, 以後は D.E.F.B.) 「キリスト教女性同盟」(1865年にフランスでカトリックとプロテスタントの両宗派の活動家の合同で始まった) のプロテスタント教会系の活動家であったパウラ・ミュラー＝オトフリート (Paula Müller-Otfried 1865-1946) 等が中心になって1899年にカッセルで結成された。1901年に組合 (Verein) として法人登録がなされ、その時点から今日まで本部はハノーファーに所在する。創設時は当時の社会主義運動と同じく家庭人として健全な女性の育成が目指されたが、1904年頃には女性の普通選挙権と教会会衆における女性の地位を求める運動となっており、その観点から1908年には「ドイツ女性組合同盟」(Bund Deutscher Frauenvereine 略称 BDF: 女性解放運動の頂上組織として1894年に発足) に参加したが、過激な運動には同調できないとして1918年に離脱した。女性の選挙権と、貧民・孤児の保護とその人材育成が大きな柱であった。またその活動拠点は戦後も、多くの場所で、未婚女性や妊婦のアジュールの役割になった。リーダーのパウラ・ミュラーはヴァイマル時代に12年間にわたって国会議員であった。1969年辺りから環境保護と消費者保護に活動の重点が置かれるようになった。今日、ドイツの9州に100か所の支部があり、会員は約1万人を数える。

p. 192 **《一般的》組合** (“allgemeiner” Verein) 本篇と並んで収録されているキルステン・ハインゾーンの論説を踏まえている。そのハムブルクを対象にした女性組合の動向では、

1890年から20世紀初めにかけての時期には《職業組合》と《一般的組合》の2種に大別できると言う。女性の職業機会の拡大と職能向上を目指す目的が限定された女性組合と並んで、女性の法的・社会的・政治的・文化的地位の向上を目指す種類があり、それが一般的組合の概念でまとめられる。女性の選挙権・参政権・行政職への参画などを課題とし、屢々政党とも結びついた。ハムブルクの場合は概して中道革新であったが、少数ながら極右的な団体もみられたこと等も論じられている。

p. 193 マリアンネ・ベーゼ (Marianne Beese 1953-L) バルト海沿のハンザ都市シュトラールズント (Stralsund^{MI}) に生まれた歴史家・文藝評論家・詩人。ライプツィヒ大学で歴史学と文芸学を学び、1982年にヘルダリーンの抒情詩を論じて学位を得た。1990年代後半、ロストック大学、次いでグライフスヴァルト大学において地域史研究に研究員として関わり、女性史などを担当した。2011-12年にはベルリン大学の文藝研究組織に関わった。ロストックに居を定めて、郷土史を執筆してきた。

p. 193 フリードリヒ・フレーベル (Friedrich Wilhelm August Fröbel 1782-1852) 中部ドイツのオーバーヴァイスバッハ (OberweißbachTH) に生まれ、今日のパート・リーベンシュタイン市域マリーエンタール (Marienthal/ Bad Liebenstein Lk. WartburgkreisTH) に没した教育家。プロテスタント教会ルター派の敬虔主義の牧師の息子、学費の不如意などによりイエナ大学・ゲッティンゲン大学・ベルリン大学に断続的に在籍した。1805年にペスタロッツを訪ね、2年間その下にあつて教育学を習得した。1837年にブランケンブルク (BlankenburgTH) に幼稚園を開設し、1840年に《一般ドイツ幼稚園》として概念化されたのは、世界初であった。多くの著述を残し、邦訳には『フレーベル全集』全5巻 (玉川大学出版部 1977-1981) 等がある。

p. 195 マルグレート・フリードリヒ (Margret Friedrich 1954-L) 独バイエルン州トラウンシュタイン郡エールシュテット (Erlstätt 現 Grabenstätt 市域/ Lk. Traunstein) に生まれた近現代史家。ミュンヘン大学で心理学を、次いでザルツブルク大学で歴史学とゲルマニスティクを学び、後者で1996年に学位を得、2002年にインスブルック大学で教授資格を得た。オーストリア女子教育史を専門とし、1996年からインスブルック大学で19,20世紀の女性史を講じ、また副学長を務めた。

p. 196 教養 (Bildung) 19世紀の女性組合におけるこの概念は、男性組合や男女混合組合の場合に見られるような会員の間での知的な交流ではなく、下層の少女などへの学業支援などソーシャルワークに重点が置かれていることが多い。

p. 196 精神的母性 (geistige Mütterlichkeit) フリードリヒ・フレーベルの教育思想に根差す。母性は女性の自然にもとづくと共に、それが進展するには教養と涵養 (Bildung und Pflege) を要し、したがって母性は身体的に母親であることから独立したものと定義される。この思想を幼稚園において発展させたヘンリエッテ・シュラーダー＝ブライマン (Henriette Schrader-Breyman 1827-99) によって、特に幼稚園保母 (=女性保育士) の育成 (Ausbildung) における中心的概念とされ、《精神的母性を鍛錬せよ》のモットーが掲げられた。さらにヘレーネ・ランゲ (Helene Lange 1848-1930) とゲルトルート・ボイマー (Gertrud Bäumer 1873-1954) によって運動理念となり、アリス・ザーロモン (Alice Salomon 1872-1948) もそこから出発した面がある。それらを参照しつつ、マル

グレート・フリードリヒはこの概念を、女性の自主性の度合いが高い多様な社会活動に適用した。マルグレート・フリードリヒはこの概念を女性によるソーシャルワークにおいて自主性の度合いが高い多様な社会活動に適用した。

p. 196 庇護者思念 (Patronagegedanke) 貧民・困窮者を助ける組合の中には、庇護対象の少女の困窮や教育といった要素に限って解決する以上に、当該者の全人格への庇護者として臨むことも見受けられた。現実には被害を与えるとは限らないが、前近代的な《家一党》(家之子郎等)の思念の再現という観点からマルグレート・フリードリヒは批判的に取り上げた。

p. 198 ベアーテ・ヘッカー (Beate Hoecker) 政治学者・社会学者。政治の分野での女性の活動の意義を説く多くの著作がある。

p. 200 ピエティズムの私宅集会 (Konventikel) この語は屢々《秘密集会》と訳されるが、誤解を招きかねない(秘密結社ではない)。特定の(あるいは順番で)私人宅で開かれる信心の集まりで、教会堂の外部での集まりが靈性に近似した性格を帯びた。ピエティズムの信心の集いはその代表的なもので、多くの地域で領主によって領民の宗教心と風紀の面から奨励された。ミサまでは進まない(ミサを行えば反教会的な逸脱になる)が、参加者は日曜のミサのための晴れ着のこともあった。これが身分と仕来りの確認と再生産でもある型にはまった教会堂の参集に対して解放感を与えた。これ自体はピエティズムに限定されることなく、プロテスタント教会の周辺で絶えず現れた改革運動ではよく見られた。たとえば、少し時期は遅れるが、テオドル・シュトルムの小説『白馬の騎手』(1888)には女中が雇い主には告げずに夕方に晴れ着でそうした集まりに嬉々として出かける様子が描かれている。

p. 200 国語協会 (Sprachgesellschaften) ドイツ語の国語としての言語美と高尚言語の確立を目指して結成された詩人や有識者の団体。最も早い「結実協会」(Fruchtbringende Gesellschaft)は1617年にヴァイマルにおいてザクセンとテューリンゲンの5人のルター派の王侯によって礎が据えられた。「棕櫚の騎士団」(Palmenorden)とも称され、キリスト教信仰を表わす棕櫚をシンボルとしたように騎士修道会を模していた。中心はアンハルト＝ケーテン伯ルートヴィヒ1世 (Ludwig I., Fürst von Anhalt-Köthen 1579-1650)であった。イタリア・ルネサンスの先例に倣いつつ、文化振興の柱として国語問題に為政者が関心を寄せたもので、各地で結成された宮廷アカデミーのなかでは最大規模となり、宮廷の有識者や多くの文人が加わってメンバーは通算で890人となった。またメンバーの一人であった詩人のフィリップ・フォン・ツェーゼン (Philipp von Zesen 1619-89)によって「ドイツ心情協会」(Deutschgesinnte Genossenschaft)が1643年にハムブルクで結成され、薔薇をシンボルとした。ここで挙げられる「ペグニッツ川の花の騎士団」(Pegnesische Blumenorden)も同時期の1644年に詩人ハルスデルファー (Georg Philipp Harsdörffer 1607-58)やクライ (Johann Klaj 1616-56)によってニュルンベルクで結成され、バロックの詩人の結集として文藝史的に大きな意味を持つ。17世紀末には衰退し、18世紀に入るとバロックの詩歌刷新の次の課題を担うものとして、演劇改革を含む一般教養的なゴットシェート (Johann Christoph Gottsched 1700-66)の「ドイツ語協会」(1727年に設立)などへ中心は移った。

p. 202 **親ギリシア運動** (Philhellenismus 親ギリシア主義) 18世紀後半からギリシアをヨーロッパ文化の原点として憧憬する風潮が高まった。ギリシアは16世紀以来オスマン帝国の一部として比較的緩やかな支配下にあったが、近代化する西洋の事情が紹介され、他方オスマン帝国が衰微するなかで独立運動が高まった。フランス革命やナポレオンのエジプト遠征も直接の刺激になった。1821年に始まった独立運動は当初はまとまったものではなかったが、紆余曲折を経て1830年のロンドン議定書によって独立が列強によって認められた。この間、ロマン主義とも重なって西洋諸国でギリシアへの親近感が高まり義勇軍への参加も起きた。詩人バイロン (1788-1824) が参戦のなかで病没したことは有名である。ここの文脈ではギリシア独立戦争 (ドイツ語では Griechische Revolution ギリシア革命) への共感の広まりが意味されている。

p. 202 **ポーランド独立運動** (Polenbewegung) ロシア帝国の支配下にあった1830年11月29日にワルシャワのロシア帝国軍の陸軍士官学校のポーランド人下士官たちが起こした反乱 (十一月蜂起) を起点に広がったポーランド独立運動で、大小の戦闘を経て翌1831年10月にロシア軍によって鎮圧された。英・仏・普・奥など西欧列強は国際関係の変更を望まず、ポーランド人の闘いを見殺しにした。しかし民間ではポーランドへの熱狂的な共感が高まり、各地で支援の運動が起きた。

p. 202 **アン・フィラー・スコット** (Anne Firor Scott 1921-2019) 米ジョージア州モンテズマ (Montezuma / Macon County) に生まれた歴史学者・特に南部女性史を専門とした。ジョージア大学、ノースウエスタン大学 (イリノイ州)、ハーヴァード大学で学び、夫のスコット姓を名乗って子育てをしつつ1949年に PhD を得た。1961年にデューク大学 (ノースカロライナ州ダーラム) の助教授となり、1980年に同大学で女性として最初の歴史学の教授となり、1991年に定年となった。米南部の女性史を中心に約20点の著作があり、1984年にアメリカ史協会 (Organization of American Historians = OAH) 会長となった。

p. 203 **信心会** (Kongregation) カトリック教会では特定の聖性に奉仕することを目的と知る俗人の結集体を言う。代表的なものとしてイエズス会によって1563年に創られ1584年に教皇の認可を得た「マリア信心会」があり、イエズス会の解散時を挟んで活動が見られたが、「未婚女性のマリア信心会」はようやく1919年であった。趨勢としては、19世紀半ばから女性を教会活動に組み込む必要から信心会の形式は広がっていった。

p. 203 **社会奉仕員養成所** (Mutterhausdiakonie) カイザースヴェルト (Kaiserswerth/ デュッセルドルフ市域 NRW) において同地の教区牧師テオドル・フリートナー (Georg Heinrich Theodor Fliedner 1800-64) が妻フリーデリケ (Friederike Wilhelmine Fliedner; 旧姓 Münster 1800-42) と共に1836年に始めた恵まれない女性への救済・更生・職業訓練、並びに孤児と老人へのケアの施設で、看護婦の業務にも重点が置かれた。フリーデリケはこれに先立って監獄改善運動に携わっていた。また彼女の死後は再婚したカロリーネ (Caroline Fliedner; 旧姓 Bertheau 1811-92) が事業を共にした。その思想と実践をモデルとする施設は1861年にはヨーロッパ諸国・ロシア・USA など26か所に設立されていた。見学や実習に訪れる者も多く、フローレンス・ナイチンゲール (1820-1910) が1851年に数か月カイザースヴェルトにおいて実習に加わったことは有名である。カイ

ザースヴェルトの施設は今日も大きな規模で運営されており、世界各地の同種の活動の精神的な結集地である。

p. 204 **聖エリザベス組合** (St. Elisabethenvereine) 1879年11月19日 (テューリンゲンの聖エリーザベトの例祭日) にユーリエ・シュパンナーゲル (Julie Spannagel) と彼女の同志たちによって設立されたソーシャルワーク団体。子供・若年者・家庭・老人への労りと精神療法に重点を置いてきた。中部・南ドイツのカトリック教会圏では各地に聖エリーザベトを冠した姉妹団体があり、約1600人が活動している。なおマールブルク市はプロテスタント教会圏であるが、2 km 東には16世紀の宗教対立時代に遡る《聖エリーザベトの泉》があるなど一帯にはカトリック教会圏の小都市や村が点在している。

p. 204 (カトリック) **娘組合** ([katholische] Jungfrauenvereine) ここではカトリック教会圏が話題にされているため補足して表記した。19世紀の前半以来、カトリック・プロテスタント両宗派とも、未婚の若い男性あるいは女性を教会のイニシアティブで団体に組織し、宗教教育だけでなく一般教養をも得させる動きが各地で起きた。若い男性の場合は徒弟たちの教育機会であることも多かった。19世紀に遡る教会主導の娘組合が今も続いているところも見られる。

p. 204 **祭服組合** (Paramentenvereine) 聖職者の儀式衣装は修道院や専門の工房によって作られてきたが、19世紀半ばには教会に関わる主に女性の社会奉仕と働き口として組織化されることがあった。ここで触れられるのはカトリック教会の動向であるが、19世紀の半ばには、プロテスタント教会でも並行する動きが起きた。特に新ルター主義の牧師で神学者ヴィルヘルム・レーエ (Wilhelm Löhe 1808–72) が設立した祭服組合は、新ルター主義の考え方をファッション・デザイン・書法の次元で表現する運動と重なった。

p. 204 **グスタフ・アドルフ組合** (Gustav-Adolf-Vereine) 「グスタフ・アドルフ・ヴェルク」 (Gustav-Adolf-Werk e.V.) と呼ばれるソーシャルワーク団体。1832年に神学教授クリスティアン・ゴットロープ・グロスマン (Christian Gottlob Leberecht Großmann 1783–1857) が中心になって設立された。三十年戦争時にプロテスタント側の救援を標榜してドイツ各地で軍隊を展開し大戦闘に勝利しながらも戦死したスウェーデン王グスタフ2世アドルフ (在位 1611–32) にちなむ。プロテスタンティズムの理念による兄弟愛と互助・宣教を目的とし、ドイツに本部を置くプロテスタント教会の互助組織としては最大で、世界各国に支部が設けられている。

p. 204 **グスタフ・アドルフ女性 (支援) 組合** (Gustav-Adolf-Frauen [hilfs]vereine) グスタフ・アドルフ組合 (協会) を補完するために1848年にクレーフェ域レース (Rees/NRW) において結成された。しかし結成と活動記録が確実なのは1851年にベルリンにおいて結成された同名の団体で、また1861年には母団体の一部となった。その後、1886年から、同じ母団体と同じグスタフ・アドルフ財団 (Gustav-Adolf-Stiftung) の下で、女性団体の名称を掲げて孤児へのケアなど独自のプロジェクトを組むようになった。

p. 204 **マグダラ・アジール** (Magdalenenasyl / Magdalen asylums / Magdalen hospital) マグダラのマリアはイエスに遭って改悛した娼婦という伝説で知られる。その名前を冠した娼婦の更生施設は中世の修道会の活動などにもその例がある。近代では1829年に

アイルランドのカトリック教会が始めた「マグダラ・ランドリー」(Magdalen laundries)があり、娼婦の更生として洗濯を請け負う作業場が作られ1990年代まで続いた。ここでの文脈であるドイツのプロテスタント教会圏での動向では、1821年にハムブルクにおいて市警察長官アーベントロート (Amandus Augustus Abendroth 1767-1842; 1831年に市長) が設けた娼婦更生施設やベルリンで1841年に作られた基金・施設「プロテスタント・マグダラ基金」(Evangelisches Magdalenstift = Evangelisches Diakonissenhaus Berlin Teltow Lehnin) とその支部における犯罪性のある少女と孤児のケアを課題とした施設などが挙げられよう。論者によっては、テオドル・フリートナーが始めたカイザースヴェルトの施設もこれに含めていることがある (⇒前号 p. 203 社会奉仕員養成所)。

p. 204 **ドイツ・カトリック運動** (Deutschkatholizismus) 1840年代にドイツのカトリック教会圏で盛り上がった宗教が理性的であることを強調した運動で、リベラリズムを標榜し、またドイツの国家統一を追求した。指導者は上シレジアのグロットカウ (Grottkau 現ポ Grodków) の助任司祭でフリーメイソンのヨハネス・ロンゲ (Johannes Ronge 1813-87) であった。ロンゲは1842年から小冊子を執筆していたが、1844年のトリア大聖堂の聖着衣 (聖母マリアのマタニティ等) の御公開を機に《偶像崇拜》と難じる手紙をトリア大司教に書き送った。これにより、トリアへの巡礼の高まりと並行して、教皇至上主義や伝統的な教義 (告解の秘蹟など) への批判、またカトリック教会から第二のルターが出現すべしとの主張への賛同者も増え、世論は沸騰した。演劇人ローベルト・ブルーム (Robert Blum 1807-48) が有力なリーダーとして加わり、1845年にはライプツィヒにおいて第一回《ドイツ・カトリック公会議》と称する集会が開かれ、さらに1847年の《宗教会議》にはドイツの各地の259教区 (多くは既存の教区とは別) からの参加を見た。ロンゲとブルームは共にフランクフルト国民会議の代議員となり、急進左派として活動したが、ブルームはウィーン蜂起を指導して処刑され、ロンゲはイギリスへ亡命した。工場労働者の急増と惨状という世相に対して、労働者の健康へのケア・貧民医療・救済施設を説き、1844年のシレジアの織工一揆とも連動し、また同時期にプロテスタント教会で高まった理性偏重の《光の友》運動 (Lichtfreunde-Bewegung) とも重なるところのある運動だったが、1850-52年に禁止令に遭って急速に衰えた。ロンゲは1861年に恩赦によってプレスラウに聖職を得て、国民教会・自由教会の運動を続けた。なおドイツ・カトリック運動に女性の参加が多かったとの記述は注目すべき知見である。

p. 204 **教会会衆** (Kirchengemeinde) 教区組織、地割による信徒団でキリスト教社会の土台である。

(以下、頁は今号)

p. 180 **レッテ組合** (Lette-Verein) 「女性の職能向上のための組合」(Verein zur Förderung der Erwerbsfähigkeit des weiblichen Geschlechts) の通称。ヴィルヘルム・アードルフ・レッテ (Wilhelm Adolf Lette 1799-1868) によって設立された市民の未婚女性のための就業・生業能力向上を目的とする組合組織で、設立には英王室出身のプロイセンの王太子妃ヴィクトリア (Viktoria von Preußen 1840-1901: 短期の在位に終わったドイツ皇帝フリードリヒ 3 世の皇后) が資金面で支援した。創設者の死後はその長女アンナ (Anna

Schepeler-Lette 1827-97) が指導した。同時期に発足した「一般ドイツ女性組合」(⇒ p. 181 一般ドイツ女性組合)とは異なり、当初は運営には男性の参加を得ていた。富家の家庭教師など限られた職種しかなかった女性の社会的活動の拡大を図り、折からの産業・工業の発展に沿った会計士・織工など各種の職工と手仕事・デザイナー・写真技師・資産管理人の職能を特に未婚女性が習得することに力点を置き、そのための教育施設を運営した。また設立の趣旨から、女性の政治参加には総じて消極的であった。今日のベルリン市南辺シェーネベルクには3種類の職業訓練学校が継続している。

p. 181 一般ドイツ女性組合 (Allgemeiner Deutscher Frauenverein ADF: 1920年に Deutscher Staatsbürgerinnenverband ドイツ女性市民聯合と改称) 週刊の『女性新聞』(Frauen-Zeitung – Ein Organ für die höheren weiblichen Interessen) を1849年以來発行してきたルイーゼ・オット＝ペータース (Louise Otto-Peters 1819-95) がアウグステ・シュミット (Friederike Wilhelmine Auguste Schmidt 1833-1902) など数人の同志と共に創設した団体で、女性が (ドイツに関して) 全国的規模でネットワークをもつことを課題にしたのが大きな特色であった。1865年10月16-18日にライプツィヒで開催された大会が創設日とされる。教育と就業における男性と同等の権利を目指し、《女性による女性のためのすべてのことがら》に取り組むと宣言した。正規メンバーは成人女性とされ、当時の女性解放運動の団体とは異なり運営の中心から男性を排除した。設立年から編まれた機関誌『新路線』(Neue Bahnen) は家庭雑誌であることを拒否するなどフェミニズムの傾向が特色であった。なお創設期から男性理解者としてアウグスト・ベーベル (August Bebel 1840-1913) を名誉参事とし、また後年1899年アウグステ・シュミットによって刊行されたパンフレット誌『男子大学生と女性』(Der Student und das Weib) はクララ・ツェトキン (Clara Zetkin 1857-1933) の講演を指針とするなど SPD の思想・人脈とも重なりがみられる。なおシュミットは、結婚には教会も役場も要らないと論じ、離婚を正当な権利と見るなど《愛における女性の選択の自由》を説いた。

p. 181 ケルスティーン・ルッツァー (Kerstin Lutzer) 女性史研究家、本論集と同年に「赤十字」の歴史的展開をバーデン地方の女性組合との関係の面からを洗い直した次の大著を刊行した。Der Badische Frauenverein 1859-1918. Rotes Kreuz, Fürsorge und Frauenfrage. Stuttgart 2002.

〔訳者解説〕

本篇の書誌データは前号の「小解」において記した。クラブ・ソサエティ・アソシエーション・フェルアインなどの名称で呼ばれる結集形態 (ここではクラブ・組合ないしは組合と略す) のドイツ近代の女性史に即した研究である。そのテーマをめぐる女性史家たちの国際フォーラムの報告書の性格をもつ論集の一篇であり、編者自身による概観である。先ずテーマの特質と広がりをつかむ便として論集の構成を挙げる。

リタ・フーバー＝シュペール ドイツ市民社会における女性主体のクラブ・組合

論集『組織化と参劃——19世紀の西欧と USA における市民女性の組合文化』の構成

Organisiert und engagiert. Vereinskultur bürgerlicher Frauen im 19. Jahrhundert in Westeuropa und den USA.

緒言 リタ・フーバー＝シュペール Rita Huber-Sperl, *Vorwort*

序論 リタ・フーバー＝シュペール Rita Huber-Sperl, *Einleitung*

I. 組合の展開とその開始・継続・断絶

Aufbrüche, Kontinuität und Diskontinuität in der Vereinsentwicklung

リタ・フーバー＝シュペール「ドイツ市民社会における女性主体のクラブ・組合——《長き》19世紀：1780–1910年期の概観」（本篇） Rita Huber-Sperl, *Bürgerliche Frauenvereine in Deutschland im «langen» 19. Jahrhundert — eine Überblicksskizze (1780 bis 1910)*.

アン・フィラー・スコット「19世紀アメリカの女性組合——慈善から改革へ」

Anne Firor Scott, *Amerikanische Frauenvereine im 19. Jahrhundert: Von der Wohltätigkeit zur Reform*.

マリア・B・バーダー「ドイツにおけるユダヤ人女性組合の成立」 Maria B. Baader, *Die Entstehung jüdischer Frauenvereine in Deutschland*.

アゼール・ミルズ「チャリティは海——フランスにおけるカトリック女性と救貧活動」 Hazel Mills, „La Charité est une Mère“: *Katholische Frauen und Armenfürsorge in Frankreich (1690 bis 1850)*.

アン・M・ボイルン「市民的な女性組合における宗教と人種——19世紀初めのニューヨークとボストンの事例」 Anne M. Boylan, *Religion und Rasse in bürgerlichen Frauenvereinen am Beispiel von New York und Boston zu Beginn des 19. Jahrhunderts*.

ユッタ・シュヴァルツコプフ「家庭の母と主体的女性の間——19世紀前半のイギリスにおける女性による改革団体」 Jutta Schwarzkopf, *Zwischen Familienmutter und weiblichem Subjekt. Weibliche Reformassoziationen in Großbritannien in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts*.

II. 女性解放運動・市民女性の参劃・社会奉仕

Frauenbewegung, Bürgerinnenengagement und soziale Dienste

ベアータ・クレム「姉妹らしく手を差し伸べて共同作業へ——1865–1894年期のドイツにおける市民的な女性運動の広域ネットワークの開拓者としてのライプツィヒの女性たち」 Beate Klemm, „Mit schwesterlichem Handbieten zu gemeinsamem Wirken“. *Leipziger Frauen als Wegbereiterinnen eines überregionalen Netzwerkes der bürgerlichen Frauenbewegung in Deutschland (1865 bis 1894)*.

レグラ・ツウルヒアー「マリー・ゲグ＝プフリーン (1826–1899) ——性差規準とフェミニズム・プログラム間の緊張の中での政治参加」 Regula Zürcher,

Marie Goegg-Pouchoulin (1826–1899). *Politisches Engagement im Spannungsfeld von dualistischer Geschlechterordnung und feministischem Programm.*

キルステン・ハインゾーン「市民社会における平等と格差——ハムブルクの女性組合」 Kirsten Heinsohn, *Gleichheit und Differenz im Bürgertum: Frauenvereine in Hamburg.*

マリアンネ・ベーゼ「19世紀から20世紀初めのロストックにおける女性組合」 Marianne Beese, *Frauenvereine in Rostock im 19. und frühen 20. Jahrhundert.*

グンダ・バルト＝スカルマニ「ザルツブルクの《大公妃マリー・ヴァレリー記念児童施設組合》——19世紀から20世紀への転換期における市民的女性組合」 Gunda Barth-Scalmani, *Der „Erzherzogin Marie-Valerie-Kinderspitalverein“ in Salzburg: Ein bürgerlicher Frauenverein der Jahrhundertwende.*

ケルスティーン・ルツツァー「福利と《女性問題》の間——1859年から1914年に至る《バーデン》女性組合」 Kerstin Lutzer, *Zwischen Wohltätigkeit und „Frauenfrage“ der „Badische Frauenverein“ 1859 bis 1914.*

補論

Exkurs

カーリン・シュロット「服装も振る舞いも《ともかく目立たないのが肝心》——ドイツ帝国期の《公の場での女性》に対する規制」 Karin Schrott, „Vor allem hütete sie sich vor allem Augenfälligen – in Kleidung und Benehmen“: Reglementierungen für die ‚Frau im öffentlichen Leben‘ im deutschen Kaiserreich.

論者について

人生歴に関わるデータについては近年論議があり、ここでも基本的な事項にとどめる。フーバー＝シュペール女史はミュンヘン郊外の出身で、ハノーファー大学等で歴史学、社会学、政治学を学び、1991年にハノーファー大学において歴史学で学位、その数年後に同大学で教授資格を得た。すでに1980年代末からミュンヘンのドイツ聯邦共和国国防軍大学歴史研究所の教授マーリット・ニーフス女史に就いてドイツ近代女性史に取り組み、同研究所の研究員となった。本書が編まれた頃はハノーファー大学で歴史学を講じていた。同時にドイツ聯邦共和国国防軍大学（ミュンヘン）の歴史研究所に上級研究員として籍を置いている。専門はドイツ女性史である。が、この論者の成果のなかでは本篇が含まれる編著が一般的に知られている。言うまでもなく、米・英・仏の研究者との聯繫による比較研究の故である。寄稿者では特にアメリカのアン・フィラー・スコット女史が米南部女性史のパイオニアで著作も多く、アメリカ史学会の会長をも

リタ・フーバー＝シュペール ドイツ市民社会における女性主体のクラブ・組合

務めた有力者であった。ドイツの部でも、キルステン・ハインゾーン女史は現在ハムブルク大学の歴史学の教授であり、マリアンネ・ヘーゼ女史はバルト海岸ロストックに居を定めて、郷土誌の文筆家としてだけでなく、一般にも女性問題の論客として知られている。寄稿者の紹介は今後も機会を見て続けるが、ここでは集団形成の研究史に本篇を位置づけようと思う。

論説の注目点

本篇は、テーマに即した歴史の流れについて、その基本的な輪郭を把握する試みである。概説と言ってもよいが、このテーマではそれ自体があまり先例を見ない。ともあれ記述は難解ではなく、また本邦でなじみの薄い事項には訳注をほどこしたため、個別の解説は必要ではないだろう。むしろ以下では、研究史の観点から背景や周辺事情について幾つか補足しておきたい。

a. テーマ：近現代の女性史における結集の意義

本篇、またそれを含む論集のテーマは、もとの国際的な発表大会を踏まえて、そのフォーラムを企画・主宰し、成果を論文集にまとめたフーバー＝シュペール女史の考え方でまとめられている。重点は、近現代史において女性の自主的な組織がもった意義にある。言い換えれば、傑出した人々の思想や個人史ではなく、結集に照準を定めている。訳者がこれに注目したもの、先ずアソシエーション（フェルアイン）研究としてであった。論集の主題提示にあたる「概観」で引用されるアメリカの女性の平凡にも響く述懐が、話題の何であるかを直截に語っている。

一人一人ではまったく注目されなかったのに、組織になると、影響力が出て、自分たちの意見を他人に聞いてもらえるようになったのです。
(論集原書 S. 11)

なお、このアメリカのドキュメント（1890年）からもうかがえるように、論集ではアメリカやフランスのアソシエーション・クラブ・ソサエティとドイツのフェルアイン等の間に本質的な区分は想定されていない。それぞれの国、あるいは地域によって、あるいは都市と村落などによって差異が

見られるのは当然だが、基本は同質の集団形成と解されており、それは歴史的にも現今の様相にも概ねあてはまる。注目すべきは、本篇も論集全体でも市民に焦点があてられていることである。近代市民社会における上・中流の人々であり、逆に見ると、近代資本主義が本格化する過程で出現した労働者層や20世紀初めまでは存在した農業の分野での貧農や小作人などはほとんど取り上げられていない。それらの階層はソーシャルケアの対象ではあっても、彼ら自身が結集の主体になるのは（事例は皆無ではないが）、男性（あるいは男女混合）の組合の場合に比べて困難だったからである。もっとも、労働者階級の女性ということでは、たとえばクララ・ツェトキンが指導した運動が早くから日本でも紹介されているが、この論集ではわずかに触れ合うところがある程度なのは、視線が市民階層に向けられているからである。が、市民に焦点を合わせたことによって、現代社会の源流につながる脈絡がとらえられることにもなった。概括的には、19世紀の（上流市民というより）中流市民の行動様式や生活形態が今日の市民社会の基準へとつながっているからである。

b. フェルアイン（クラブ・組合）研究と女性組合研究

アソシエーションへの着目は、すでに19世紀の前半からその例があり、その起点としては有名なアレクシ・ド・トクヴィルのアメリカ論のなかの数節が決まって挙げられる。また1840-60年期が米・仏・独とも法学の分野で結社をめぐる論議のエポックとなった等の経緯もある。しかし研究の流れが形づくられるのは遅く、本格的には第二次世界大戦後のことであつた。社会学が中心であつたが、その際も一部では戦勝国や国際機関が関与したドイツの民主化の課題とも結びついていた面もあつた。アソシエーション、ドイツ語ではフェルアイン、ここではクラブ・組合あるいは簡単に組合と呼んだ結集形態の研究が本格化するのは1970年代であつた。歴史学ではトーマス・ニッパードのフェルアイン理解があらわれ（1972年）、社会学や民俗学でも指針的な論説が書かれて、新たな局面が切り開かれた。ユルゲン・ハーバーマスの『公共性の構造転換』（1962年）もそれに交叉するところがある。

なお参考までに言えば、アソシエーション、ソサエティ、クラブ、ドイ

ツ語ではフェルアインと呼ばれる結集は日本にとっても決して珍しいものではない。すでに明治時代には結社の法制化の課題として射程に入っており、明治31年施行の民法33条と34条における《社團》の規定は、正にドイツ法学界の論議を踏まえたものだった。西洋の実態を識知していた識者もあり、早くは福沢諭吉の周辺の人々が明治13年発会の「交詢社」の結成の過程で情報を得ていたようである。また夏目漱石、柳田國男、山路愛山などがそれぞれの立場から西洋のアソシエーションやクラブに言及している。官庁では内務省がそれを管轄していた。なお会社（広義の株式会社）の意味での結社は同じく明治32年制定の商法の第51条の《社團》がそれに該当する。近年の話題を拾うと、サッカーのＪリーグの創設の論議において西洋のスポーツ組合（社団法人）が改めて議論になり、今日では地域総合スポーツ・センターのあり方とも重なる。

市民社会の自由な結集のポピュラーな形態がアソシエーションで、現代社会とは切っても切れないものであるが、それをめぐる研究は意外に手薄であった。女性史の視点となるとかなり遅く、女性が中心の結社の研究となるとさらに新しい。女性が中心になって結成されたアソシエーションが近・現代史における看過すべからざるファクターの一つではないか、という問題意識が本格化するの英米では1970年代後半から、ドイツ語圏では1990年代である。

もっとも、それ以前にも男女同権をめざす運動や女性の参政権獲得までの歩みに関する研究、さらに特定のソーシャルワーク団体の形成史（たとえばフローレンス・ナイチンゲールによる女性看護師の運動）は幾らも書かれていた。そうした個別モチーフに注目した研究も、改めて取り上げればアソシエーション研究と重なってくるが、女性が結社を組むということ自体に主軸を見定めて歴史の諸現象を洗い直す研究の潮流は概ねこの時期からであった。英米が幾らか早いことは上にふれたが、たとえば論集への寄稿者であるアン・フィラー・スコットはアメリカ合衆国南部の女性史の分野でその視点を確立させた定礎者であった。そうした外国の刺激をも吸収しつつ女性による組合形成の歴史への関心がドイツにおいて高まったのである。ここで取り上げた論集はその時期にこのテーマで登場した（少なくとも）ドイツに関しては主要な論者が一つのフォーラムに集まった観が

ある。女性による結社への着目が1990年代に入って火がつきたちまち燃え上がって10年で一つの節目を迎えたとすれば、フーバー＝シュペール女史が呼びかけたフォーラムは里程碑であり、その成果であった。

c. 女性組合をめぐるフェードインとフェードアウト

では、なぜこの時期にまでずれこんだのか、についても触れておきたい。それは視点の取り方で女性が主体の組合は見えなくても不思議ではないことが関係する。いわばフェードインとフェードアウトが起きるのである。

予て訳者は、西洋の集団形成の理解において指標となる知見が一般に共有されることを願ってドキュメントの提供を試みている。その一つとして数年前、本誌にドイツの民俗学者アルブレヒト・レーマンの「民俗学とクラブ・組合」を訳載して解説をつけた（愛知大学国際問題研究所『紀要』第154号 [2019], pp. 85-114）。ここで話題の手掛かりにするのは、そのなかの一節である。その論説には「組合とメンバーの人生」という一章があり、年齢推移と組合への関わり方の典型が描定されている。そこでの一文だが、男女の差異について《女性はほとんどどこでもそうだが〔組合の〕祭りの時に姿をみせる程度である》というまとめ方がなされている（p. 101）。女性は組合には自らはほとんど関わっておらず、メンバーの家族として組合の祭りなどに顔を見せる程度、というのである。この記述は、本篇に目を通した後では偏りのように見えるだろう。しかしここに偏見や見落としだけを讀むのはやや早計で、二三の要因を考える必要がある。

一つ目は研究の時代的な側面である。レーマンの原文は1984年に書かれており、それに対してクラブ・組合・アソシエーションへの女性の関与について研究が進むのは（先にふれたように）1990年代からであった。それ以前は、結社研究の開拓にも携わった数人の女性研究者（戦後のドイツ社会学では有力な存在であるエリーザベト・プファイル、レナーテ・プフラウム、ベニータ・ルックマン等）の場合でも、女性史の観点は希薄であった。研究の展開に沿って振り返ると、先ずはフェルアインという結集形態そのものを押さえるという基礎的な取り組みであったと位置づけることできる。

二つ目は、レーマンが民俗学の観点から論じていることである。ちなみ

にレーマンの出発点はハムブルクに近い地域の労働者村の実態調査と分析であった。つまり重点は地域の人間関係の仕組みに置かれており、スポーツ組合などの細かな観察が入っている。そこから見ると、家族のなかでスポーツ組合のメンバーになるのはたいてい男性である。たとえば学校児童のサッカーや成人男性のアマチュアないしはホビーとして行なわれるサッカーの受け皿となっている町や村のスポーツ組合である。そうした団体によって開催される試合や年に何度かの祭りはドイツでは極く一般的であるが、その場合には家族で応援に出かけ、また知人との団欒ともなる。そうした地域の付き合いという観点からは女性組合が見えてこないのは必ずしも不思議ではない。もっとも、1970年代後半あたりからスポーツ組合への女性の参加が次第に高まり、それが今日の状況へとつながっている。したがって男性のメンバーの添え物として家族が射程に入るというのもその辺りまでだったろう。

一般的にも、女性が主体の組合が1980年代でも直ちには目に入らなかったという事情は、他ならぬ本篇の論者の回想からもうかがえる。論集のはじめには編者フーバー＝シュペール女史の「前書き」があり、このテーマにどのように気付き、どのように取り組み、そして論集にまでいたったがまとめられている。語られているのは1980年代半ばの経験と思われるが、それはレーマンがフェルアインを論じた時期でもある。その文章は次のように始まるのである。

女性組合の歴史への関心が私のなかに芽生えたのは、ある市立アーカイヴの目録で《児童保護施設の設立と維持のための女性組合》というデータ名に気づいたときであった。当時、私には、そうした組合は想像もつかなかった。

改めて言うまでもないが、フェルアインについては、ドイツ人なら子供の時から誰もが知っており生活の一部である。英米人ならクラブやソサエティ、フランス人ならアソシエーションがそれに当たる。したがってクラブ・組合は身近な暮らしと切り離せないが、それでも女性組合となると見当がつかなかったのである。

この問題は、集団形成における地域性と超地域性の問題とも重なる。と言うのは、実際には女性が主体の組合もかなり早くから存在していたことは本篇からも明らかである。しかしそれは地域を超えた何らかの目的団体であることが多かった。たとえば地域の誰かがフェミニズム運動に参加していても、近所の人々とは直接的にはほぼ無縁である。それは（性差とは別ことだが）アソシエーション（フェルアイン）の一種である学術分野の学会組織を考えてみても分かるだろう。近所の誰かが何らかの学会のメンバーであったり、あるいはUFO探索の会のメンバーであることは地域の日常とはあまり関係がなく、周囲には知られていないことも多い。しかし広域・時には全国レベルでは（さらにグローバルな広がりでも）そうした団体は活発で、世の中の動きに有機的に関わっていることもある。したがって地域の日常的なレベルでとらえるか、世の中を動かすファクター（歴史のファクターと言ってもよいだろう）として見るかで視野に入る対象が違ってくるのである。

三つ目の要因として教会がある。地域と密着した活動において女性が重要な役割を果たしてきた大きな分野は教会会衆、すなわち教区の信徒組織と、さらにそれと密接な教会系の集合であった。遅くとも19世紀末に近づく頃にはカトリック・プロテスタント両宗派とも、女性の参加なくしては教会への結集の活力は危うくなっていた。しかしその種の団体を市民的な女性組合としてどう評価するかについては、微妙なものがある。組織の性格上、（よくも悪しくも）教会官庁のネットワークとの重なりが大きく、現場でも聖職者がほとんど不可侵のリーダーであることが多いため、市民の自由な結社の原理からは議論になることがある。

また本篇を含む国際的な共同研究では、総じて近所付き合いのような地域の人間関係ではなく、大小はともかく広域的なネットワークであるような結集が問題にされている。言い換えれば、クラブ・アソシエーション・ソサエティ・フェルアインは（基本的には男女の区別にはかかわりなく）そうした射程の大きな結集を可能にする組織形態である。またそこに女性史を食い込ませたのがこの論集の特色であった。それは、論集が歴史学の共同研究であることもとも符合する。日常性が濃厚な集団ではなく、歴史の動因としての結社という観点からの取り組みである。

d. 組合公共性

本篇（だけでなくこの論者の見解）には他にも注目すべき知見が幾つもあるが、もう一つ挙げておきたい。それは女性組合だけのことではなく組合一般の捉え方として、したがって集団形成の研究において注目しておきたいことがある。むしろそれが、専ら女性組合を追跡することにつながったと考えられる。フェルアイン・クラブ・ソサエティ・アソシエーションといった、ここでは組合と略称した集団を公共ないしは公共性すなわちパブリック（Öffentlichkeit, public）の概念と結び付けていることである。この視点の先行者では、アメリカの政治家キャスリーン・D・マッカーシー（1949年生；コネチカット州下院議員をつとめた）がよく名前が挙げられる一人である。が、ドイツ語で《組合公共性》（Vereinsöffentlichkeit）という言い方は、フーバー＝シュペール女史において（造語者かどうかはともかく）強く現れる側面である。もっとも、組合という結集にパブリック性を見るのは（見方にはかなり幅があるが）、先に挙げたハーバーマスにその理解があり、また社会学ではフェルアイン研究を代表してきた一人ハンス＝イェルク・ジーヴェルトもそれを論じている（研究史の里程碑として翻訳を供したジーヴェルト「ドイツ社会学の研究課題としてのフェルアイン（クラブ・組合）」愛知大学国際問題研究所紀要第155号〔2020〕pp. 287-316. 及び第157号〔2021〕pp. 129-160., 特に157号 pp. 136-137）。フーバー＝シュペール女史の関心は、突きつめると女性の公共性への参画、あるいは公共性の獲得を追うことにある。論集の「概説」の一節はそれを端的に語っている。

女性たちは、活動のための自由な空間と行動の手ごたえ、また公的な存在としての自分たちを感じとった。組合女性たちは、新たな経験を蓄積し、また他では羽ばたかせることができない能力を獲得し、政治や公的機関との交流において自己を発現させた。もっとも、組合の仕事を果たしたとて収入や独立を得たのではなかったが、アクチュアルにふるまう存在として、職業や経歴に代わるものを得て、場合によっては公的な役割や空間やポジションに通じる道にもなった。女性組合という世界において、男性の公共性とパラレルな構造が成り立っている。

女性が公共性をつかみとる経緯がどうであったか、それは自分たちの組織をもつという道をとる以外にはあり得なかったという問題意識、これがその研究、また論集の性格を決定ないしは枠付けている。逆に、公共性の性格が怪しくなるような結集が視野の外に置かれたのは、その方法的視点であると共に、女性組合の歴史的特徴ともかき添っている。男女の差異とは別の次元、またフェルアイン・クラブ・アソシエーション研究とも少しずれるが、広義での結社への注目となると、ある種の秘密結社、マフィアや密輸グループや（主義主張の是非はともかく）地下組織も話題に上ることがある。しかし市民的公共性の形成、とりわけ女性におけるそれが課題であることが裏社会を除外して対象を明確に区切ることにつながったようである。しかし際どい事例にまったく触れられていないわけではない。やや過激で通常は仇花か泡沫のように扱われるドイツ・カトリック運動について、それが多くの女性を惹きつけたと評価をしているのは注目してよい(前号, p. 204)。

e. 本篇への書評から

本篇とそれが含まれる論集の視点について研究史的な位置づけは上で簡単に試みた。しかし同時代の研究との関わり、言うなれば学界事情との関聯にも触れておく方がよさそうである。その点で注目されるのは「ドイツの《長き19世紀》の市民的女性組合」という論説のタイトルである。周知のように、1789年のフランス革命から1914年の第一次世界大戦の勃発までを《長き19世紀》と呼び、さらにそれを1914年から1991年までの《短き20世紀》と対比したのはイギリスの歴史学者エリック・ホブズボームであった。たしかにアンシャンレジームからほとんど現代ともかき添る市民社会の確立に至ったタイムスパンは、その間の幾多の変革と無数の事象、そしてそれらが今も関心をそそる緊迫度は、おそらくその次の100年間よりも大きいであろう。が、ここで瞥見程度にせよ取り上げたいのは、それを女性史に当てはめた先人の存在である。オーストリアの近現代史家で女子教育史をレポートリーとするマルグレート・フリードリヒ女史（インスブルック大学教授）である。実は、フーバー＝シュペール女史の編著が刊行された直後その書評をおこなったのがフリードリヒ女史であっ

た。しかもそれは、やや辛口の論評を含んでいた。女史は、フーバー＝シュペールの場合、《市民的女性組合》の概念は《シャープさに欠ける》と指摘した。具体的には、女性組合の活動が慈善から自助へと進む大勢はともかく、その結社としての内部の仕組みや運営の実態に踏み込んでいないと言うのである。教会の周辺に成立した女性組合が聖職者の指導下にあったことも女史は特に問題にしている。また女性組合の分類では、1909年の「ドイツ帝国女性団体統計資料」を下敷きにしていることにも、早くからそれを踏襲するカテゴリーを用いることを問題視してきた立場から疑義を投げかけている。フリードリヒ女史が「庇護者思念」や「精神的母性」を分類における指標として挙げているのはそれに代わる分類基準の主張である。《庇護者思念》は自由な市民的結社から前近代性への逆戻りを指す。《精神的母性》は、教育家フリードリヒ・フレーベルとその思想の実践者ヘンリエッテ・シュラーダー＝ブライマンによって確立された理念で、幼稚園保母（＝女性保育士）の育成における中心的概念として日本でも知られている。それが女性運動の指導者ヘレーネ・ランゲとゲルトルート・ボイマーによってソーシャルワークに臨む理念となり（後にはナチズムとの相関も起きるが）、アリス・ザーロモンもそこから活動を始めたことも併せて、この概念の下での女性メンバーの自主的運営を重視した分類カテゴリーであった。今日でもフェミニズムのあり方では精神的母性は議論のテーマの一つである。

なお本篇は日本でも一部では注目されており、西洋史家の北村陽子名古屋大学准教授が本篇所収の〔グラフ4〕を、（本篇の趣旨からやや逸れる観点においてだが）女性の戦時動員とそのための組織形成の時代的な波動という文脈で転載している（『近代ドイツにおける戦時女性動員と社会活動の形成』同志社大学人文科学研究所『社会科学』第41巻〔2011〕pp. 149-173, 該当頁p. 151）。

はじめにも触れたが、本篇の訳出にあたっては版權を有するウルリーケ・ヘルマー社（現在の所在地はドイツ、ヘッセン州ロスドルフ：Ulrike Helmer Verlag, Roßdorf bei Darmstadt/Hessen）から好意的な配慮を得たことを改めて明記する。